様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２１年４月１０日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５３０５４３
研究課題名（和文）　がん患者と家族の心理的ストレスとその心理社会的要因に関する臨床心理学的研究
研究課題名（英文）　Clinical psychological study for psychological distress and psycho-social factor on cancer patient and those family.

研究代表者
岩満　優美（IWAMITSU YUMI）
北里大学・大学院医療系研究科・准教授
研究者番号：００３０３７６９

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：心理的ストレス、がん、特性不安、感情抑制、ストレスライフイベント、気分、化学療法、緩和ケア

１．研究計画の概要

本研究では、第１に、初診時、確定診断後、手術、化学療法などの治療といった一連の経過のなかで、がん患者とその家族の心理的ストレスについて調べ、そのリスク因子（感情抑制、特性不安、個人属性）について質的および量的に検討する。特に、がん患者の会話内容と性格傾向との関連について調べ、がん患者の心理反応について詳細に検討する。また、副作用の強い化学療法をとりあげ、化学療法前後の神経心理学的検査も実施し、認知機能についても調べる。

第２に、緩和ケア病棟に入転院する患者や家族が抱える心理的ストレスについても調べ、終末期のあり方についても検討する。

以上により、心理的ストレスの軽減に向けた、がん患者や家族に対する心理的介入方法を提案する。

２．研究の進捗状況

(1) リスク因子のひとつに、ストレフライフイベントが考えられる。そのため、ストレスライフイベントに関する質問紙の日本語版を作成した（ストレス科学にて論文掲載）。

(2) がん患者の心理的ストレスとコーピングについて、ストレスライフイベント、特性不安、自覚症状の有無を考慮し検討した。その結果、特性不安の高さが心理的ストレスと関連していた。特に初診時では、ストレスライフイベント経験が心理的ストレスと関連していた。さらに、心理的ストレスを感じていると病気に対する前向き思考が低くなることが示唆された。

（３）乳腺外来にはじめて受診した患者の心理的ストレスを予測する因子の同定を試みた。その結果、特性不安、自覚症状、ライフイベントの否定的な評価が、心理的ストレスを予測していた。特に、特性不安の高さは心理的苦痛と高い相関関係にあった。（Supportive in Cancer に掲載受理）

(4)乳腺外来にはじめて受診した患者を対象に、面接を実施し、受診前後の心理的反応について質的に分析した。その結果、特に、受診するまでの経過や気持ちについて、否定的感情を表出することが多いことがわかった。（Palliative and Supportive Care にて掲載受理）

(5) 乳がん確定診断前後の患者の心理的反応について面接調査を行い、特性不安および感情抑制との関係から量的および質的の両側面から検討を行った。その結果、以下の点がわかった：①高不安群は低不安群に比べ、否定的感情の表出が高かった。②一方、低不安群は、癌に対する楽観的思考や受容といった肯定的感情を抱く人が多く認められた。③感情抑制者は感情表出者と比べ、確定診断後における否定的感情の表出が高かった。（Japanese Bulletin of Social Psychiatry, にて論文掲載）

(6) 化学療法を受ける乳がん患者と健常者を対象に、認知機能検査を実施し、化学療法による副作用の影響に関する検討を試みている。現在のところ、両群に違いは認められないが、さらなる検討が必要である。

(7)緩和ケア病棟に入転院した患者と家族が抱く転院前後の緩和ケア病棟のイメージに

ついて検討した。その結果、転院までは、患者と家族の約4割が「死に場所」「想像がつかない」といった否定的な印象を持っているのに対し、入転院後には約9割が「穏やかに過ごす場所」「スタッフへの肯定的印象」など肯定的な印象に変わることがわかった。さらに、緩和ケア病棟で勤務する看護師を対象に質問紙調査を行い、緩和ケア病棟の入転院のあり方について検討する。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

がん患者の心理的ストレスについては、データはすべて取り終えており、量的および質的分析はかなり進んでおり、すでに一部は論文としてまとまっている。また、化学療法による副作用に関する認知心理学的研究についても、順調にデータを収集している。さらに、緩和ケア病棟への入転院に関する研究についても、データはおおよそとり終えており、データ分析を実施し、一部は論文としてまとめている。

以上より、多くの研究を同時に進行させており、円滑に進んでおり、順調に進んでいると考えられる。

４．今後の研究の推進方策

(1) がん患者の心理的ストレスを予測する要因の同定に関する研究は、すでにデータを収集し終わり、一部データを分析している。このままデータ分析を引き続き速やかに行い、論文としてまとめる。

(2)がん患者の心理的ストレスについて、心理面接を実施し、質的分析を行うが、こちらもすでにデータを収集し終え、データ分析を一部行っている。引き続き、このままデータ分析を実施し、論文としてまとめる。

(3) 化学療法による副作用に関する研究については、乳がん患者群および健常群ともに、エントリーはほぼ終わり、一部はデータ収集し終え、分析を始めている。引き続き、データ収集と分析を実施し、論文としてまとめる。

(4)緩和ケア病棟に入転院する患者や家族の心理的ストレスに関する研究についても、患者、家族、および看護師を対象にほぼデータ収集し終えており、データ分析を実施している。引き続き、データ分析を実施し、論文としてまとめる。

(5)以上より、心理的ストレスの軽減に向けた、がん患者や家族に対する心理的介入方法について検討し、提案する。

５． 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① Okazaki S, Iwamitsu Y, Kuranami M, Todoroki K, et al., Psychological responses of outpatient breast cancer patients before and during first medical consultation. *Palliative and Supportive Care*, (in press)、査読有

② Ando N, Iwatmitsu Y, Kuranami M, Okazaki S, et al., Psychological characteristics and subjective symptoms as determinants of psychological distress in patients prior to breast cancer diagnosis. Supportive Care in Cancer, (in press)、査読有

③ Okazaki S, Iwamitsu Y, Kuranami M, Hagino M, et al., Trait anxiety and emotional response before and after breast cancer diagnosis. *Japanese Bulletin of Social Psychiatry*, 17(3): 245－256、2009、査読有

④ 岩満優美、安田裕恵、神谷美智子、和田芽衣ほか、日本語版 Life Experience Survey 作成と妥当性・信頼性の検討、ストレス科学、23(3)、55－65、2008、査読有

〔学会発表〕（計２件）

①岩満優美、岡崎賀美、蔵並　勝、ほか、感情抑制者の乳がん確定診断前後の心理的変化について、第21回日本サイコオンコロジー学会学術総会、2008年10月9－10日、東京.

②岩満優美、蔵並　勝、岡崎賀美、ほか、乳腺外来受診と乳癌告知時の心理的ストレスと心理特性について、第14回日本乳癌学会学術総会、2006年7月7日、金沢

〔図書〕（計１件）

① Iwamitsu Y, Buck, R. Nova Science, Coping with Cancer (Toward psychological intervention for cancer patients: emotional suppression, psychological distress, and coping with cancer 担当), 2008, 77-94.

〔産業財産権〕

なし。

〔その他〕

なし。